

アシュトンの シンデレラ

2010.11/27 ~ 12/5

レパートリー
Repertory

Ashton's Cinderella

オペラバレス | 6回公演

振付: F. アシュトン

Choreography: F. Ashton

作曲: S. プロコフィエフ

Music: S. Prokofiev

監修・演出: W. E. サムス

Staged by W. E. Soms

舞台美術・衣裳: D. ウォーカー

Designs: D. Walker

照明: 沢田祐二

Lighting: Y. Sawada

指揮: D. ガルフォース

Conductor: D. Garforth

管弦楽: 東京フィルハーモニー交響楽団

Orchestra: Tokyo Philharmonic Orchestra



ウィンターシーズンは新国立劇場で バレエ『シンデレラ』を家族へプレゼント

英国人ビントレー次期舞踊芸術監督のウィンターシーズンにふさわしく、20世紀英国が生んだ名振付家アシュトンの『シンデレラ』を上演します。新国立劇場では、ウィンターシーズン恒例の公演として『くるみ割り人形』と『シンデレラ』をレパートリー化していますが、この『シンデレラ』は、愛とユーモア、ペーススがたっぷりの舞台で、日本では新国立劇場バレエ団だけが上演する傑作バレエです。1999年の新国立劇場初演以来、今回で7回目の再演となる人気演目で、家族そろって楽しく過ごすバレエプレゼントとして大変好評を得ています。

ものがたり

意地悪な義理の姉二人は、王子から招かれた舞踏会に行く準備に余念がありません。シンデレラをかばう父親もはねのけて、彼女を召使いのようにこき使います。今は亡き母を慕って悲しむシンデレラの前に仙女が現れて、魔法の一振りでカボチャは立派な馬車に、シンデレラのみすぼらしい服は輝くばかりのドレスに変わります。



フレデリック・アシュトン(1904～1988)

Sir Frederick Ashton

「バレエのシェイクスピア」と称された叙情性とユーモアに溢れた作風を持つ。20世紀の真の巨匠ともいべきロイヤルバレエの振付家で、名キャラクター・ダンサーでもあった。1904年南米エクアドル生まれの英国人で少年時代にアンナ・パヴロワの舞台を観てバレエを志す。英国に戻って学業を終えた後、レオニード・マシーンに入門。さらにマリー・ランベール他著名な教師に師事して、種々の舞台に立つ。その一方で、26年には振付家処女作『ファッションの悲劇』を発表する。28年にはパリのイダ・ルビンスタインの舞踊団にダンサーとして参加し、プロニスラヴァ・ニジンスカの作風から大きな影響を受ける。翌29年ロンドンに戻り、本格的な創作活動を開始。35年に英国ロイヤルバレエの前身ヴィック・ウェルズ・バレエにダンサー兼振付家として招かれる。同時期に入団しやがて英国最高のバレリーナに成長するマーゴ・フォンテインに多くの新作を振り付け、バレエ団発展の原動力となるとともに、英国バレエ独自の気風を確立した。63年には設立者ニネット・ド・ヴァロワの後を継いで芸術監督に就任。70年の退任後も80年代半ばまで創作を続け、88年に英国サセックスにて永眠。代表作に初の全幕バレエ『シンデレラ』、マーゴ・フォンテインのための『オンディヌ』、一幕の物語作品『真夏の夜の夢』『田園の出来事』、抽象バレエの『シンフォニック・ヴァリエーションズ』『ラ・ヴァルス』、映画ではハリネズミを自演した『ピーター・ラビットと仲間たち』などがある。



セルゲイ・プロコフィエフ(1891～1953)

Sergey Prokofiev

ウクライナ生まれ。ペテルブルグ音楽院で作曲とピアノ、指揮科を専攻。リャードフ、リムスキー＝コルサコフらに学び、1914年にロンドンを訪れ、ストラヴィンスキー、ラヴェルの作品に接する。バレエ・リュスを率いるディアギレフにすすめられ、ロシア的な題材のバレエ音楽を書き始める。後期バレエ・リュスと深く関わり『鋼鉄の歩み』とバレエ・リュス最後の新作『放蕩息子』を作曲した。ロシア革命後アメリカ滞在を経て34年には祖国に移住。共産党政権下の厳しい状況の中で精力的に活動を続け、作曲家として高い地位を築く。20世紀物語バレエの最高傑作のひとつとなった『ロメオとジュリエット』、ボリショイ劇場バレエのための『シンデレラ』、『石の花』と名作を次々と発表した。